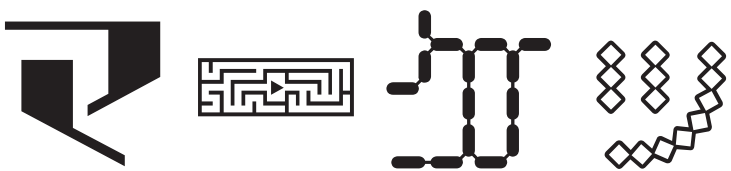


ト 田 字 校

探求編

in
そ
こ

豊後 9 縣 9 町



マーケットで感じる共同体意識

曖昧である強さは、日常の安心を生む

「疎外感」

って何者なんだろう
ジャッジじゃなくて対話になる

できないことができるようになる、繋がり

「弱さ」や「迷惑」に代わる言葉を見つけたい

見落とされがちな一人ひとりのストーリー

迷惑をかけたらずの後にいいことがある

効率や利便性とそうでないもの

やりたいこと、助けられること、安心なんだ

企業の複雑さとマーケットのシンプルさ

川瀬さんと渡邊さんのいるカレッジ

企業と地域は運命共同体なのかもしれない

企業が「公共空間」をもつということ

その先の景色も見えてきた

マーケットの学校という小さな運動

マーケットの学校は、マーケットを主題に地域生活を考える対話型ワークショップです。2020年度に埼玉県北本市ではじまり、草加市では顔の見える経済循環の新たな探究の場として2022年度よりはじまりました。

マーケットの学校には、考え方も生きてきた年数も今やっていることも違う人たちが集まります。交換の原初的な形態であるマーケットについて考えることは、地域で共に生きることを考えることに繋がります。商いや働くことや生きることについて、一人ひとりの思いや経験を話していると、次第におぼろげだったことが「そういうことなのかもしれない」と浮かび上がってきます。

私たちは地域で共に生きること、顔の見える経済循環のまだ見ぬ可能性を信じているのかもしれませんが。経済人類学者のカール・ポラニーは複数の民族の研究から、“労働に対する報酬を期待することは人間にとって「自然な」ことではない。労働しようという気持ちになるのは、通常、利得によってではなく、互酬、競争、仕事の喜び、社会的な賞賛によってである”と述べています* 1。経済的豊かさのために働くことが当たり前のように受け入れられている現代ですが、実はそうではなかったというのです。では、共に生きる、社会的豊かさのための労働ってなんなのか、マーケットの学校はそんなことを考える小さな運動のように思います。

この冊子は、マーケットの学校の内容を振り返り、私たちが紡ぎだしてきた地域生活におけるマーケットの価値をみなさんと共に考えることができたらとの思いでつくりました。

* 1. カール・ポラニー [新訳]大転換 東洋経済新報社 2009

案内人

	美央さん オープラスアーキテクチャー合同会社 代表社員 「このまちにくらすよろこびを、もっと」をテーマにまちや建築に関わる様々なプロジェクトを手掛けている
---	--

振り返りのトーク者

	美乃里さん つなぐば家守舎株式会社 取締役 「DIO=欲しい暮らしは私たちがつくる」を掲げ子連れで働けるシェアアトリエつなぐばを運営ローカルデザイナー
---	--

	秋谷さん 草加市職員 産業振興課 リノベーションまちづくり担当 昨年度からマーケットの学校担当 マーケット当日は新婚旅行で惜しくも不在
---	--

	共子さん 特定非営利活動法人believe 副代表 約20年間草加で福祉を展開 臨床発達心理士、社会福祉士、保育士として障がいを持つ子どもから大人まで地域で安心して暮らせる支援を目指す
---	--

	川守田さん 出店しない人の関わり方も欲しいよねと始まった焚火担当
---	--

	千田さん 草加市職員 今年度、民間企業からの転職と共にマーケットの学校担当に マーケット当日はバトミントンも楽しむ
---	---

	直さん つなぐば家守舎株式会社 代表取締役 建築士・シェアアトリエつなぐばを運営 日常に寄り添ったマーケット「つなぐ八市」を毎月第4土曜日に開催
---	--

会話に登場した「マーケットの学校」参加者

	赤間さん パートとセミオーダー子供服の活動で2足のわらじを履いている 探求編では印象に残るお話をしてくれ実践編では出店も
---	---

	記子さん 草加市出身、草加市在住 アクセサリー作家とフォトグラファーとして活動
---	--

	小野さん まつばら綾瀬川公園を紹介してくれたり草加のことをたくさん教えてくれる
---	---

	渡邊さん 昨年度マーケットの学校参加者で愛煙家マーケットの心地よさと愛煙家コミュニティの居心地の良さに通じるものを感じている渡邊さんのいるマルイ
---	--

	川瀬さん 住んでいる市より草加市が好き 昨年度は会場提供 今年度は設営などでお手伝い 川瀬さんのいるマルイ
--	--

	吉田さん 草加市職員 産業振興課 課長補佐 プライベートではお菓子作りに情熱を注ぐ
---	---

	國分さん フランスで見たマーケットの一角でスポーツをする風景を草加で実現
---	--

	内田さん 旅好きで探求編ではいろんな角度の話をしてくれた 実践マーケットは家族で参加
--	---

	金谷さん 今年度から松原団地記念公園でマーケットを始める マーケットの学校としても併走中
---	---

	林さん 多彩なバイク屋 マーケットの学校を機にいりやんの着ぐるみを作り大人気
---	---

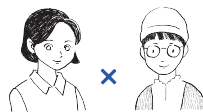
	美雪さん 草加でみんなの活動を応援し 自身は町会への波及に向けて働く
---	---

	上野さん マーケットの学校で藤田さんに出会いやりたいを叶えた獨協大学生
---	---

	中田さん 普段のマルシェ出店とは違うマーケットの学校ならではの視点・実践で世界がぱっと広がった
---	---

	市村さん マーケットの学校をきっかけに絵本の古本屋さんを始める
---	---

	真下さん 草加市職員 産業振興課のSNS担当 投稿される文章はボエムのよう
---	---

マーケット×個
2023.07.18

マーケットで感じる共同体意識

美央さん 個とマーケットを考えるスタートとしてマーケットの学校の中で「あなたにとってのマーケットとは」とたずねると多くの人が「人と人が繋がる場所」と答えてくれました。私もマーケットは、所属や立場を超えて一人ひとりが商いを通して向き合えるところが面白いと思っています。出店者でもある赤間さんが、「出店すると普段の自分から切り替わるスイッチが入る気がする。パートの仕事を自分でもなく、母親として家を守る自分でもなく。自分の好きなことを純粋に楽しめるのがマーケット」とおっしゃっていたのが印象的でした。

美乃里さん 私も赤間さんのコメントはかなり印象に残っています。マーケットは個（自己表現）と仕事の曖昧な場所。赤間さんのようにほぼ自己表現の場として考える人もいれば、逆にほぼ利益をメインに考えてくる人もいて、人によってそのバランスが違ふし、マーケットのテーマによっても違ってくる。その曖昧さが好きだけど、自分のモヤモヤにもつながっていると感じました。

美央さん 私も曖昧でいいと思っています。分かりやすさや客観的であることが求められがちだけど、それは誰かが決めた線引きで、現実には曖昧なことが多い。

美乃里さん マーケットの学校の中でも買い手側の意見で顔の見える人の商品ならちょっと高くても買うという話が結構あって。実際に自分もそうだし周りにもそういう考えの人が多くいるから、小さな地域経済は体感として、できてきている印象があります。

美央さん 支払ったお金が誰の収入になるかが明確で、その後もまた地域で使われる可能性も感じていて共同体意識みたいなものがあるのだと思います。記子さんがおっしゃっていた話で、マーケットで列に並び隣り合わせた人と会話をして、偶然一週間後にその人と会ったけど、もしかしたら今までも会っていたかもしれないと思ったそう。なんか面白いなと思って、記子さんに「スーパーの前後に並んでも話しかけないけどなんでマーケットでは話しかけたと思いますか？」って聞いたら、「マーケットでは同じ意識を共有している仲間意識が生まれるのでは」って答えてくれて、なるほどと思いました。都市の中での私たちは無数の中の1つになっていて顔が無くなっている。他者に対してもパーソナリティがあると思ってはいけないし、自分自身もパーソナリティがある振る舞いをしてはいけないような状態が生まれていて、困っている人がいても声を掛けて良いかすらわからない。顔が見えないことが当たり前になってすっかり都市に飼いならされてしまっているけど、実は人の本能に反した不自然な状態を強いられている気がします。でもマーケットではもっと自然な状態でいられる気がします。

曖昧である強さは、日常の安心を生む

美央さん 一方でマーケットはインディペンデント（自立的）な場であることが面白いんじゃないかな。運営者も出店者も自分達で考えて自分の手の届く範囲のことをやるし、来場者の買い物は個々の判断です。
美乃里さん 稼ぐよりも繋がりを求めることにモヤモ

やするのはなぜでしょうか。本当は地域経済の循環にも繋がるからいいことのはずなんですけど。

美央さん モヤモヤ抱えちゃいますよね。その理由はいくつかあると思っています。

1つ目は自分の中にあるもの。「偽善」という言葉が美乃里さんから出てきたけど、例えば私もそうだけどサラリーマン家庭で育った人は勤め人としての稼ぎ方が前提にあって、そこから外れていること、稼ぎだけじゃない人生の豊かさを重視していることに対して後ろめたさを感じてしまうことがあるのかもしれない。仕事は大変なこと、お金はその対価という刷り込みが心のどこかに残っているのかもしれないですね。

2つ目は他者から自分に向けられる矢印。マーケットや小商いに対して「おままごと」と批判されることがあります。リスクを負うからこそできるダイナミックな動きもあるけど誰もがそれに向いているわけじゃないのに自分が信じる商いと違う形の商いを否定する人がいます。小さなことから始めて大きくする人もいますが、そういう人を知らないから「おままごと」で片付けられてしまい、その視線を気にしてしまう。覚悟もリスクも持たずに商いが始められることがマーケットの可能性であり、面白いことなのに。

3つ目は未来に対する不確定さ。今の時代何やっても不確定で、関係性を増やすことの方が柔軟に助け合うことができますが、ロールモデルが身近にいなかったりするとやっぱり不安になります。だけど、私はどれもなんとかなる、気にしないでいいんじゃないかって本当は思っています。

美乃里さん この話は頭では理解できているのですが…。例えば、私たちつなぐばは稼ごうとしてないから応援したくなるってよく言われるのですが複雑な気持ちになって（笑）。老後が心配でも繋がりがあれば何とかなるだろうという気持ちと、ただ感謝の気持ちを伝える手段の一つがお金だと感じることもあります。このあたりは答えが出なくて一生モヤモヤしそう。

美央さん そう、お金もやっぱり大切でそれを軽んじられるのも違うと思う。ただ、貨幣価値だって変化する

し絶対じゃない。お金は数値化されたわかりやすい尺度だから安心しちゃうけど危うさは大きい。

美乃里さん 金の切れ目は縁の切れ目って言葉がありますが、お金がないと切れてしまう関係性って本当に寂しいです。

美央さん 分かりやすさを頼りにし過ぎるのって実は不便な世の中ですよ。安心したい気持ちも分かるけど、曖昧なものをどう受け入れていくか。仮設の場として一時的に現れるマーケットは、存在自体が曖昧で変化を前提としている。参加している人たちが曖昧さを許容して楽しむことが共有されたマーケットでは、安心できて楽みたいだと思ふことがあります。子どもが何か失敗をしたとしてもどうにかなる安心感があります。曖昧であることは弱いことではなく、むしろ強靱で、私たちはまちの日常にこうした安心を求めているんじゃないかなと思っています。

「疎外感」って何者なんだろう

美央さん もう一つ、個とマーケットの話でいうと、去年のマーケットの学校からよく話題になったのは「疎外感」という言葉。マーケットの主催が「開いているよ」って言葉でいくら言っても、現場には身内感があって閉じて感じられるマーケットだってある。

美乃里さん 最近、全く知らないマーケットに行くことが無くなってきているので、疎外感を感じるようになってきました。市外のイベントでも誰か知っている人が出店しているから遠くまで行ってみようと思うようになり、自分のマーケットに対する価値基準もそうなってきました。

美央さん そう考えると疎外感を感じている人も例えば出店者のひとりとでも仲良くなれば無くなるのかもしれないですね。

美乃里さん 無くなると思います。そこで新しく素敵な出店者と出会って繋がりが、その出店者が別のイベントに出た時に行ってみようとして広がっていく気がします。

美央さん 疎外感って自分が受け入れられていない苦しさだと思うけど、崩すことは意外と簡単かもしれない。自分が自分自身を疎外されていると判断しているだけで、他者から押し付けられていることではないから。草加市の吉田さんが面白いことをおっしゃっていたのですが、「疎外感はあるものだと思って、入りやすいところを見つけて入る」と。疎外感を感じなくて良いということではなくて、疎外感を感じてしまうもののだとして受け入れて、自分の行動で解決できると考える方が良いなと。

美乃里さん あと、大学生はよく「疎外感」を話題にすることが多いなと思います。学生の頃はクラスの中で浮いたりしたら疎外感を感じたり自分の居場所がないと思うことがありましたよね。人によりますが大人になるとそれが薄れてくる気がして、個を認められるというのか自分自身を受け入れられる年齢になってくるのかもしれない。

美央さん 大人になるとだんだんと生き方や状況が違い過ぎて比べられなくなるし、自分との付き合いも長くなって折り合いがついてくるから、個が個であることを認めやすくなるのかもしれないですね。でも私達世代でも「母親はこうあるべき」や「前の上司はこうだった」という話は頭をよぎることはあるし、そういう枠や視線に囚われてしまっているところはありますよね。

ジャッジじゃなくて対話になる

美央さん 他者が自分をジャッジすることも自分が自分自身をジャッジすることも減らせたいいなと思います。あるいはジャッジがあってもそれをエネルギーに変えたり、自ら手放したりして誰かになろうとしなくていい。誰かになろうとしなくても活躍できるのがマーケットなのかなと思います。

美乃里さん ジャッジしたがるというか、例えばGoogleの口コミの☆マークとか。振り回されないようにしようと思っていても振り回されてしまう自分がいます。ひとつの判断基準が欲しいってことなのかもしれ

ないけど、ジャッジすること自体が減ったら気持ちも楽になるのになって思います。

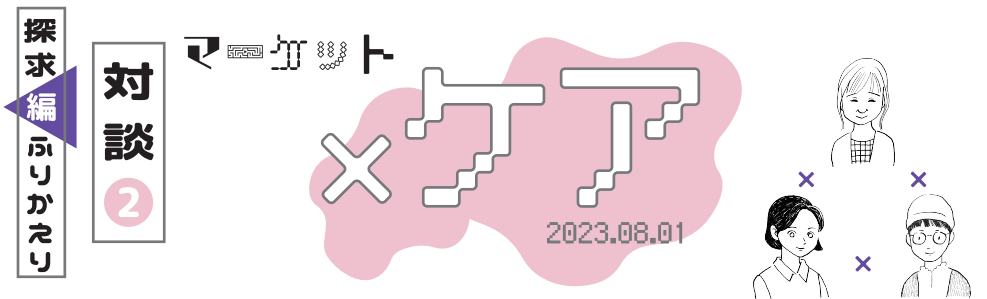
美央さん ジャッジする時は断定することで安心したいし、自分が他者に影響を与えられる満足感があると思います。情報が溢れてしまっているからこそ、目の前で話せて目の前でリアクションできる、直接的なコミュニケーションの面白さが見直されている気がします。

美乃里さん 「そこで言ってよー」って思います。それが成立すると安心感につながりますよね。

美央さん その場で言うって評価じゃなくて対話になる。対話になると相手の発言の裏側にあることが分かり、会話の行き来の中で互いに理解が深まる。都内の有名なマーケットでは、関東以外からの生産者さんもよく出店していて、その方々は市場調査を目的に出店している方も多い。デパートに卸しているだけだと売れる理由も売れない理由も分からないけどマーケットだとお客さんと直接話ができるのがいいって。人と人が向き合って対話できる、大したことじゃないような気がするけど実は知らず知らず失われている。対話の機会をまちの中にもっと増やしていきたいなと思うし、したら何かが変わるんじゃないかと思っている。地域の面白さや可能性も対話や繋がりにあると思います。

草加市職員からのコメント

秋谷さん 参加者のある大学生のコメントで「マーケットに行く時、ヘアゴムがほしいから買いに行く等、明確な商品やサービスを求めて行くことはあまりない気がする」と言っていたのが印象的です。マーケットでは求めている商品に出会えなかったり、売切れているかも知れない。確実な商品やサービスを求めるなら店舗やネットで購入しますよね。不確定で不完全な場だからこそ、予想し得ない気付きや偶然の出会いがあるのがマーケットの魅力なのかも知れないです。良いマーケットはそのまちの縮図だと言われることがありますが、日常に根付いたマーケットが展開されているまちは心地の良いまちなのだと思いますね。



分かり合えなくても、重なっている部分があればいい

美央さん ケアは繊細な話だし、人によって経験も大きく違うから、言葉にすることが難しいけど「マーケット×ケア」は、今回のマーケットの学校でぜひやりたかったテーマなんです。マーケットの学校に来てくださった共子さんは、「重度のグループホームは地域に内包されるものであってほしい」と言われていました。関わりがないから分からない、特別なものと見なされがちですが、それはケアもマーケットも同じだなと思っています。接点が増えればその感覚が変わってくる。例えば私はよく行く場所に自閉症の方がいて、特定の行動を繰り返すのを見かけます。その行動が安心行動であることは理解していますが、最初の頃は戸惑うこともありました。

美乃里さん 自分にとって普通じゃない行動に慣れないこともあるけど、自閉症の方が近くにいる、その行動を繰り返すと、だんだん慣れて、普通になっていくと思います。

美央さん 普通じゃなくてもいいし、共感できなくてもいい。はじめはちょっと構えてしまうことも悪いことじゃない。ただなんとなく共に過ごせるようにあたたかなまなざしを持って、お互いをいらないことにしないでいたいなと思いました。

美乃里さん 確かに。美央さんがマーケットの学校が始まる前に、「分かり合えなくてもいい」と言っていて、すごく心が楽になりました。分かり合え

なくて当然なのに、分かり合えないことを理由に切り離すか、敵対視するようなことはしんどいですよね。分かり合えない関係性でも、近くにいる重なっている部分があればいい。理解してもらおう、共感してもらおうという思いが強かったけど、「分かり合えなくてもいい」と聞いて、諦めじゃなくて受け入れられるようになりました。

美央さん 小野さんが「この人がどういう人か分からないと接することができない」とおっしゃっていたのも芯を食っていると思いました。まずはゆるやかにでも知ることが一歩なんだと。

「弱さ」や「迷惑」に代わる言葉を見つけたい

美央さん 共子さんのお話を聞きながら、ケアを要する人は、まちの優しさを引き出してくれることがあるのかなと思いました。

共子さん そうですね。誰もが弱さを持っていて、だからこそ人の愛に触れるきっかけになる部分はあると思います。

美央さん 弱さって隠さなきゃいけないって思いがちですけど、誰だって持っているものですよ。マーケットでの助け合いも、仮設という不安定さから生まれる関係性がありますよね。急に雨が降ってきたとか、風でものが飛んだとか、ハプニングから声をかけるきっかけが生まれる。

共子さん 迷惑をかけることが多いけど、それが後の関係性のきっかけになるんです。迷惑をかけ

て終わりというわけではなく、今度はこちらから何かしたいと思うので。

美央さん 弱さが見えることで人と人の関係がはじまることもありますよね。

美乃里さん 弱さを見せるのは勇気があることですよね。若い頃は自分ができる人間に見られたいという思いが強かったのですが、年を取ると弱さが丸見えになることもあり、今はもうあまり気にならなくて。(笑)

美央さん 人はそもそも弱いもので、だからこそ他者と関われるのだとしたら「弱さ」や「迷惑」ではなく、それを表す新しい言葉が必要かもしれないですね。

美乃里さん 社会的弱者という言葉についても、私はためらいを感じます。何となくそういう言葉を使っていますが、モヤッとした気持ちはありますね。共子さんは、どのように受け止めていますか。

共子さん 一般的な言葉では私も弱者とか迷惑といった言葉を使いますが、内心は違うと感ずることが多いです。グループホームでの経験から、私は彼らが本当に強いと感じていますから。彼らと一緒に夕食を食べていると、むしろ教えられることが多くて。

美央さん 私は子どもの頃に長期入院を3回ほど経験しました。入院前はなぜ自分だけがと悲しんでいたのですが、入院すると私より小さな子たちが、寂しさや大変さを抱えながらもたくましく楽しんでいる姿がありました。当時私は中学生だったんですが、いつも遊んでいた幼稚園くらいの子が、私が術後集中治療室にいる時に「がんばって」の「が」の点々が逆の文字で手紙くれたことを今でも覚えています。

共子さん ケアする、ケアされるって一方通行じゃないと思っています。やりがいや共感があって、相手が幸せを感じるのが嬉しかったりします。

美央さん 人と人が関わる、それがケアの歩なのかもしれませんね。

見落とされがちな一人ひとりのストーリー

美央さん マーケットとケアについて共子さんはどのように感じられますか。

共子さん マーケットとケアは、居場所として関係性を生み出しているの、すごく似たところがあると思います。でも、マーケットのほうが相互に助け合える関係が生まれるので、ケアを受ける時の罪悪感のようなものがないので、そこは違うかもしれません。

美央さん ケアを受けることに対する後ろめたさや罪悪感、持たなくていいと言われても持てしまいますよね。赤間さんが子育てサポートの方にお子さんのお迎えを依頼した時に「お母さんのお迎えの方がいいよね」って言われてモヤモヤしたっておっしゃっていましたが、同じ子育て世代としてすごく分かる。その方に悪気はないんだけど、自分の中にある罪悪感をクリックされる感じがするのかもしれません。美雪さんは、ケアされるって意識を持たずにそこに行くだけで元気になれる場所があったらいいとおっしゃっていたのですが、自然と声を掛け合え、助け合えるマーケットにはそういった側面があるのではと思いました。

美乃里さん きっと、私たちは知らず知らずのうちに他人に迷惑をかけていますよね。

美央さん マーケットの学校でみんなと話していた時、同世代の女性の話はすごく共感できるし想像の範疇でしたが、男性の話すケアに関する内容は意外な内容が多かったです。一見ケアが必要なさそうな成人男性もそれぞれに抱えているものがある。時に社会は悲しいほど冷たいというストーリーを共有してくれた方もいました。見落とされがちな一人ひとりのストーリー、求めているケアがもっと社会の中で内包されていくことが大事なのかなと思いました。

共子さん 見えないと、なかったことにされてしま

いますよね。理想を言えば地域全体が一人ひとりお互いを尊重し、個性を認める社会であれば見えないことはなくなるのかなって思います。見る側が「あたりまえ」の眼鏡を外し、人と接すればその人の持つ個性や素敵な部分が見えてくる。「あたりまえ」の眼鏡で見える弱みやマイナス面が、周りの人の眼鏡が外れていると自分自身の眼鏡も自然と外れ、今まで弱みやマイナス面だと感じていた部分をありのまま受け入れられます。

効率や利便性とそうでないもの

美央さん 話を変えて、制度の話をしたと思います。ケアは地域にとって必要ですが、制度が整うと本来の意味が失われることもあると共子さんがおっしゃっていました。マーケットも同じで、ルールだけで縛るのではなく現場での柔軟な判断が重要だと思っています。ケアもマーケットも行政の伴走が必要ですが、制度化しすぎる弊害も考えないといけませんよね。

共子さん ケアの分野では、制度に当てはめると安定して運用できるのはたしかです。でも、それだけでは不十分で、一人ひとりの困り事に目を向け、救えていない部分に光を当てる視点が必要だと思います。制度に当てはめるだけではすごく危険です。**美央さん** 制度が先行してしまうと、「あなたは〇〇だから△△に行ってください」で思考停止してしまい、個々のニーズが見落とされますよね。型にはめるのは楽かもしれませんが、目の前の人のことをちゃんと見ないと分からないことは多い。マーケットもマーケットの開催自体が目的化されがちですが、地域をよく見て今ある魅力やこれから引き出したい可能性を考えていかないと形だけのものになってしまう。

共子さん 制度が整ったからこそ今まで包括できていたことがこぼれ落ちてしまうこともあります。

美央さん 必要性が認められたから制度化された

のに、実際にはそこに新たな分断や溝ができてしまっている。大事な指摘ですね。

美乃里さん 効率化が求められる世の中で、型にはめることが多くなりますね。必要な時には便利さを使って、時にはあえて非効率を選ぶ。そんな風に自分でうまく分けられればいいと思います。

美央さん 格差が広がる中で新自由主義の豊かさには限界があると感じている人も少なくないと思います。ケアの可能性はここにもあって、ケアを考えると便利さや効率ではない価値が分かりやすくなる気がします。

共子さん そうですね。便利さや効率と真逆のところがあって、速さや正確さを求めてしまうと、理解されないことがあります。

美央さん 効率や利便性ではなく、自分のこだわりを持っている感じでしょうか。

共子さん ケアに携わっていると、そこにこそ価値があると強く感じます。

迷惑をかけた後にはいいことがある

美央さん 共子さんが「自分がしんどいと感じた時、彼らと接することで自分の悩みがちっぽけに思える」と言っていたことも印象的でした。

共子さん 本当にそうです。彼らは自分の軸で生きていて、楽しそうで幸せそうです。それを見ると、普段私がとらわれている考えがバカバカしく思えてきますし、質の高い生活はこちらにあると感じますね。

美央さん 私たちは社会に翻弄されがちですが、自分の軸を持って生きる強さには惹きつけられますよね。マーケットの出店者たちも、商品へのこだわりや、自分のやりたいことが明確で个性的な方が多く、そうした個性が光る場でもあります。**共子さん** ケアとマーケットの共通項が「個性」で、とても面白いですね。

美乃里さん 制度に当てはめると個性が失われが

ちですね。マーケットには、自分らしく生きたいと思う人たちが集まるのかもしれませんが。

美央さん インターネットや流通の発達により、インディペンデントな生き方の選択肢が増えた部分もあると思います。マーケットでいえばSNSでの広報活動や情報収集、ネット販売を併用することで収入が安定化しやすくなりました。流動性が高くなり型がゆるくなると、各々異なる手段を組み合わせて商いをしていくのだと思います。

美乃里さん いろんな生き方が受け入れられる世の中になってきていると思います。

共子さん 人に分かってもらえなくても、合意や共感を得られなくても、「自分には軸がある」と自信を持つことが大事です。障がいを持つ方々の魅力や価値を伝えることは私の課題です。今回はそれができて良かったです。

美央さん 共子さんの現場の経験からのお話はとても強くて優しく心強かったです。一人ひとりに対して社会あるいは地域としていかに寄り添えるか、それがケアなのかなと思いました。顔の見える関係性が地域のセーフティネットにもなっていくのだと思います。

.....

草加市職員からのコメント

吉田さん 文章を読んで「らしさ」という言葉が浮かんだ。「自分らしさ」は自分の内側で認めるもの。「〇〇さんらしいね」って時は、他者からの見え方。

マーケットの学校で大切にしたい事である「一人ひとりを大切に」「優しいまなざしを持つ」を持って、交わることで、この2つの「らしさ」がなんとなく近づいていくのが幸せな世界かも。

なんて哲学的ですかね。笑



企業が「公共空間」をもつということ

美央さん 地域経済の活性化は、地域内事業者で消費をすること、地域内で資本が循環することが基本にあります。またこうした購買行動は、地域コミュニティの醸成、購買行動の楽しさをもたらし、暮らしの豊かさを向上させます。一方で地域外に拠点を置く企業や大型店が地域にもたらす意義もあります。マーケットの特徴である個の集合体や顔の見える経済循環とは相反するように見える企業ですが、そんな簡単に線引きできるものではないんじゃないかと思い「マーケットx企業」のテーマで話したいと思いました。

企業で働いていた経験のある千田さんと秋谷さんは顔が見える経済循環と企業についてどう思いますか。

千田さん 企業で働いていると消費者が見えにくくなる場合があります。外部よりも社内に目を向けがちです。これはあまり良いことではないと感じていました。

美央さん なるほど。内部評価が外部や現場より優先されてしまうことはありますよね。本当は現場では必要ない予算でも、減額されると部署内で居場所がなくなるから予算取りをやるという友人の話聞いたことがあります。企業あるあるなのかもしれませんね。

一方で企業は、影響力があったり、場を持っていたり、個では届かないところにリーチできる強みがあります。昨年度のマーケットの学校ではマル

イの川瀬さんと渡邊さんが参加してくれていたことをきっかけに、マーケットの実践はマルイの店頭で行うことになりました。駅前の一等地で顔の見える経済循環に挑戦してみようという試みでしたが、個人ではこんなことは叶わなかったと思います。

美乃里さん そうですね。7年前にもマルイが「*2. 私たちの月3万円ビジネス」の修了生のために場を提供してくれました。

美央さん 場の提供は企業と地域が繋がる可能性の一つですが、企業としても安心して貸せないとか、テナント料をどうするかとか、難しい課題があります。また室内空間の場合、地域側も公園のような心地よい空間とは違い、室内空間を活用する手札が少ない気がします。

美乃里さん 室内のテナントを利用するときはイメージや空気感を作るのが難しいです。

美央さん 「公共空間」として、新たな使い方が企業、地域の双方から模索されていくといいなと思います。企業と地域、両者の窓口がうまく繋がると可能になることも増えると思います。

千田さん 昔は異動が重要視されていましたが、最近はその価値が薄れてきていますよね。特に場所が変わっても仕事内容が変わらないなら、地域に密着したほうがいい仕事ができると思う企業もあります。

美央さん 企業も転機ですね。今までの拡大戦略だけでは生き残れない。選ばれるためには、商品価値だけでなく、人との繋がりや店舗への愛着を

作る必要があります。ローカライズ戦略を取る企業も増えていますが、それには企業が培ってきたブランド意識だけではなく、地域と繋がりを作る必要があると感じます。

千田さん 最近では就職する側も大都市や大企業への志向が一昔前より薄れ、地域密着型の企業も増えています。本社を地方に移転する企業もありますし、考え方が変わってきているようです。

美央さん 企業がローカライズとしてマーケットを活用している例も見られます。地域との繋がりを作ろうとしているものからとりあえず場を提供しているものまで玉石混交ではありますが、マーケット的な場の使い方を企業が考えることで新たな形が見えてくるかもしれません。

千田さん これは想像ですが、企業が空き店舗スペースを地域に提供することで、新しい顧客を獲得することができると思います。ただし、企業で働く人には利益を求める圧力がかかるので、それが新しい取り組みを難しくすることもありますよね。

美央さん 利益が生まれるポイントを長期的にとれると変わりますよね。すぐに利益を生まないことでも、いずれはお客様の愛着醸成や収益に繋がると思います。

企業と地域は運命共同体なのかもしれない

秋谷さん まさに美央さんが言ったような取り組みに、京都信用金庫の例があります。彼らはコミュニティマネージャーを育成する支店を作って、ノルマを廃止したそうです。その支店の行員は最低限の事務をしたら、あとは地域のお困り事を聞き、信頼関係を築くことに注力しています。そこからお客様のニーズに合ったサービスの提供につなげていると聞きました。私自身も地方銀行で働いていましたが、組織のノルマや企業の方針がある中で地域のお客様と信頼関係を築き、求められるサー

*2. 私たちの月3万円ビジネス…草加市主催の女性創業スタートアップ事業

ビスを提供するという本来的なミッションを日々の業務の中で達成していくことはとても難しかったです。地方銀行や信用金庫が統廃合される中、京都信金のような取り組みは今後重要になると思いますし成功してもらいたいです。

美央さん 面白いです。地域企業として地域との運命共同体になっている。京都信用金庫の例は画期的ですが、よく考えると企業と地域が運命共同体ということは中小企業だと違和感なく理解されそうですよね。

美乃里さん 地域活動などの取り組みがもっと明確に伝われば、消費者との繋がりが強まると思います。

美央さん 今は企業の活動を知るためには積極的に情報を探さなければならないことが多いですが、情報が伝われば消費者としても選択しやすくなります。「消費アクティビズム」という、消費を通じて社会的な態度を示すことがアメリカのZ世代の間で広がっています。

私も共感する企業のものを積極的に買い、逆に共感できない企業についてはできる範囲で利用を再考しようと思っています。例えば今は銀行を変えようかなと思っています。

美乃里さん それはなぜですか。

美央さん 今はメガバンクとネットバンクを使っていて、身近な選択肢としてあったからよく考えずにはじめたのですが、本当にそれでいいのか疑問を感じるようになりました。

美乃里さん 私もつなぐばを始めてから、地域密着型の信用金庫に変えました。ネットバンクに比べて手数料が高いことや、オンラインが有料といった問題はありますが、そこは折り合いをつけながら。

美央さん 前回のケアの回の話とつながりますが、やっぱり不便さをもっと楽しまないといけませんね。不便だけどまちに貢献できている意識やそこで生まれるかもしれない繋がりを楽しむような。

川瀬さんと渡邊さんのいるマルイ

秋谷さん 私の前職の銀行でも地域活動は行っていたのですが、支店としても個人としても地域のコミュニティにスポットの参加ではなく、継続したコミュニケーションやプロジェクトを行っていくことは難しく感じました。企業が本当の意味で地域に密着し、社員が個人単位で独自の活動を行うケースが増えるといいですよ。

美央さん 昨年度のマーケットの学校で、最初は「マルイの川瀬さんと渡邊さん」って思っていたのですがお二人と対話を重ねるうちに、ある時マルイに行った際にふと「川瀬さんと渡邊さんのいるマルイ」と思ったんです。ちなみに私は10年位マルイが身近な生活をしていたので、私自身驚きました。企業って絶対的な気がするけれど個人と個人の繋がりで簡単に更新されると気づいた経験でした。また、大きな企業であっても「この人だから」「この人がいる企業だから」という関係性が繋がると安心感や満足感になると気づきました。でも、企業側から見ると、個人の顔が見えることのデメリットがあるのでしょうか。

川守田さん 企業の一員として発言すると、その意見が企業全体の意見とみなされることがあります。僕は以前コールセンターで働いていたのですが、そこで答えたことが企業の公式見解として受け取られることがありました。また、個人の顔が強くなると、その人が仕事を離れると顧客と企業との関係も途絶える可能性があります。

千田さん 会社の看板を使って出会うことはメリットですが、個人的に繋がった後に、会社の看板を背負っていることで悩むこともあります。何か個人的にお願いしたくても、自分の裁量ではどうにもできないことがあってモヤモヤすることもあります。

秋谷さん 銀行を退職する時に、取引先の情報やお客様との繋がりの取り扱いに関しては当たり前

の事ですが、厳しい取決めがありましたね。企業としては個人的な繋がりで取引先と関係が繋がっていることに対して、リスク管理の観点から敏感に反応することがありますよね。

美乃里さん 会社員時代に、同業他社に転職した人が以前の取引先と関係を続けることに否定的な意見がありました。担当者同士での個人対個人の関係でも、会社が変わると問題になることがあります。

千田さん 看板を使って始まった関係だとしても、個々で繋がった後は看板を外して考えたほうがいいと思います。そうしないと、「あの人はこの所属だから」というように考えてしまっ、すぐやりづらくなるので。

企業の複雑さとマーケットのシンプルさ

美央さん マーケットはレットルや看板以前に目の前に人や商品があります。作っている人、売っている人が明確で、自分が支払ったお金の流れも想像できる。この人の晩ごはんに使われるお金になるかもって実感をもてる。マーケットに出店している人も、自分の作ったものを使う人が目の前にいて、感想を直接聞くことができます。そういう場合は他にはないし、すごく貴重な場なのかもしれません。

千田さん 確かに。企業の人がマーケットに関われるとすごくいいですね。

美央さん 企業の人がマーケットに関わるのが、新人研修などで役立つかもしれません。直さんは設計事務所を経営されていますが、今日の話の感想はどうですか。

直さん 少し特殊なのかもしれませんが、設計事務所は個人の信頼が強く、独立後も続く関係が多いです。前の会社の人には知られても、「それはよかった」と受け入れてくれます。

美央さん 企業と一括りにいっても業種によって

もだいぶ違いますよね。

秋谷さん そうですね。銀行員の場合、やはりお客様の預金や借入の情報まで把握しているので、その情報を使ってビジネスをしていたら問題になります。お客さんも、私が銀行員だから話してくれたわけですからね。

美央さん 確かに。やっぱり企業は複雑で捉えづらい存在ですよ。人格はないけど性格みたいなものはある。私は企業を「さん」づけで呼ぶことにも実は違和感があります。「誰やねん！」みたいな実態の無さを感じて。(笑)

だから、商いの原点であるマーケットと共に考える面白さがある気がします。物々交換から始まり、貨幣交換、サービスとお金の交換へと進化してきましたが、ときには商いの原点に戻ってみることもいいかもしれません。企業の中でもマーケットの学校のような対話の場を持つと面白いかもしれませんね。

.....

草加市職員からのコメント

千田さん 企業は規模や業種など多種多様であるけれど、個や個の集合体と共に企業の持つ強みを活かして地域で動ける企業があればとても面白いと思います。

企業にとっては、地域を知ることにも繋がりますし、関わる所属社員の魅力が外部に伝わればそこに暮らす人々の企業に対する見方も変わると思います。マーケットを活用して地域の人と企業が繋がり、「そうか」に新たな地域活性化の動きが出てくることを期待したいです。

マーケットでつくる景色

千田さん 始めはマーケットってフリマと同じだ
と思い、売れる方法を考えるのかと想像してまし
たが、事業を進めるうちに場づくりをしているん
だと思いました。実践マーケットでは、出店者と
来場者が一体になっていて、とても良い景色が生
まれたので、そういった景色が日常としてできた
らいいなと思います。

國分さん 屋外でポッチャ体験とバドミントンや
ボーリングの貸し出しをしました。親子、小学生
がかなり楽しんでくれて良かったです。

内田さん ポッチャの体験がおもしろく子供も楽
しめた。地域の中で活動している会社や人がいる
ことを知れました。

川守田さん 今回焚火をやってみて、空間づくり
のよさを感じました。不特定多数の人がリビング
のようにくつろいだり子供が遊んだりしてくれて
とてもいい空間だったと思っております。近所に
住む身として、本当に定期的な開催があればいい
なと思いました。

小野さん ある程度の出店者が居ればマーケット
として成立することを感じられました。イベント
的な出店とは違った楽しさがありました。

できないことができるようになる、繋がり

金谷さん 実践編はかなり衝撃的で、こんなに素
敵な草加の事業者がいることを知りました。
獨協大学卒業して10年位経ちましたが、草加と関

わりがなく、マーケットをやりたくて企画を千
田さんに相談して草加でマーケットがやれるこ
とになりました。

千田さん 金谷さんが松原団地記念公園が好きで
地域の色々つながりを自身のマーケットで作っ
ていきたいと企画を持参してくれ、私も地域がつ
ながれる日常を作れるなら協力しようと思いまし
た。國分さんも協力してくれ草加松原団地自治会
の役員さんを紹介してくれました。

林さん 入山の事業は面白いことできるよって言
われ続けて10年位停滞していました。草加市総合
政策課の高橋さんがいろいろ繋いでくれて市役所
ってこんなに動くんだと感じて、心が変わりマー
ケットの学校に参加した。入山の事業をやってみ
ようと思って着ぐるみを作りました。応援してく
れていた友人も手伝いに来てくれました。

美雪さん なんで林さんをみんなが応援するのかわ
つて、自分のできないヤンチャさを持っている林さ
んに乗っかることで自分もヤンチャができるから。
なんとなくほっとけないんだと思います。いりに
ゃんの着ぐるみはお子さんが喜んでましたね。

上野さん 僕はマーケットが夢のような1日でした。
コーヒーを抽出し、販売する。店の設営やその過
程は初めてなことづくしでした。コーヒーを提供
するだけでなく、看板にチョークで名前を書いて
くださったり、草加市で知り合った人たちが買い
に来てくれたり。そして何より全面的に私のわが
ままな「やりたい」を応援してくださったレブラ
ホーンの藤田さんには感謝してしまけません。不
安でもとりあえず「言ってみる」「やってみる」が
学びです！

やりたいこと、助けられること、安心なんだ

中田さん 今回はマーケットに出店したことのない
近所のママ友を誘いました。そのママたちが自治会
のおじいちゃんたちに松ぼっくりでワークショップ

をすると話したら、おじいちゃんたちが松ぼっく
りをたくさん集めてきてくれました。他にも自治
会館でレイアウトの検討をしていたら体操クラブ
の人が声かけてくれて、彼女たちが口コミで人を
巻き込んでくれてマーケットに遊びに来てくれま
した。いつもの出店とは違い、普段の自分だけで
はできないことができた。安心感がありました。

記子さん 普段やったことのないワークショップ
をやりました。私が場を作るのではなくて来た人
が場を作る。やったことのないことができる場。
自然と助け合っていました。

いつもの出店より倍くらい荷物が多かったけど、
荷下ろし始めた瞬間すぐに助けに駆けつけてくれ
て自然にお手伝いしてくれました。それは顔が見
える関係性だからということもあるかもしれませ
んが、進んで誰かを助け合える参加者同士の関係
がとても素晴らしくて感動しました。小4の娘は
「ぼくやりますよ！どれを降ろしますか」とすぐ
に声をかけてくれた上野さんの大ファンになって
帰りました。

市村さん 一言で楽しかったです！机に本を並べ
たフリーマーケットのような状態でしたが、看板
や机を作るのも、本を漂白等でお手入れする準備
も含めて面白かったです。精一杯遊ぶことが今回
の目標だったので達成できたかなと思います。探
求編で話していた日常の中の非日常を実感した一
日でした。

赤間さん 昨年は実践編をやる前、腑に落ちなかっ
たが今年はお客さんというより地域の人と近い関
係性ができました。途中、自分の子どもがマフラー
なくして、泣きながらくっついてきた。お客さん
が探してきていいよって言うてくれて子どもと一
緒に探しに行ってきました。探求編で母親の役割
から出店すると離れられるって話したけど、母親と
いう役割もできました。隣で手が足りてなければ代
わりにお客さん対応を試みたり、手が空いてる人
が周りに声掛けて動いてみたり。出店者の中での

横の繋がりができていてやりやすかったです。み
んな好き勝手やってるのにお客さん含めみんなち
ゃんと楽しそうで、あの一角が確実にワクワクする
日常の風景になってるなぁと思って幸せでした。

その先の景色も見えてきた

中田さん 探求編では講座のたびにマーケットを
違った視点で見られること、普段関われない方々
と同じ目線でフラットに話せる場を作っていただ
き、自分の視野が広がりました。

美雪さん 縁日の楽しい思い出を次の世代に繋げ
たい、話を聞いてもらいたいと思って、昨年度か
らマーケットの学校に参加しました。
裏方がやりたくてまかないを作ると提案しました。
マーケットの学校じゃないという経験ができ
ませんでした。年齢も高いし、ハードルが高い。
でも、みんなが同じまかないを食べてくれました。
出店者の背中を見れたことで、マーケットの学校
でやっていることを八幡町で再現できないかと思
いました。疲れない、やらされた感がない活動を町
会で考えていきたいです。

真下さん 自分自身もあの場所を心から楽しんで
いました。行政の立場であっても関わりしろがあ
り、自分たちのパーソナルな部分を知ってもら
う機会にもなると思います。

秋谷さん マーケットの学校は誰にでも門戸を開
いて募集をしていて、行政の立場からすると最初
はすごく曖昧な部分への違和感や漠然と不安な気
持ちもありました。しかし、マーケットの空間に
は誰でも関与できる余白がたくさんあって可変で
柔軟だから面白いし、そこに目的や目標はなくて
いい。そんなことに気付いて、その人の暮らしが
変わっていくことが、少しずつまちの変化に繋が
るきっかけなんだと思うようになり、それを自分
なりに理解して感じることもできました。